

宛
平
縣
南
苑
附
近
の
概
要
戦
闘
經
過
の
概
要

二

0593

七月七日

七月七日第八中隊が蘆溝橋附近で夜間演習中龍王廟及宛平縣から突如支那兵の不法射撃を受けた。そこで中隊長は直に演習を中止し人員を検べ之を豐台所屬大隊長に報告したこれが今次事變の發端である。

從來當聯隊は北平に聯隊本部及第一大隊、天津に第二大隊、豐台に第三大隊及歩兵砲隊が分屯してゐた。

七月八日

支那軍の不法射撃の報に接するや大隊長一本少佐は直に非常召集を行ひ午前二時豐台發一文字山（宛平縣東方六〇〇米）に向つて前進した一方聯隊附森田中佐は聯隊長の命を受け北平特務機關員寺平大尉及冀察側の交渉員王冷齋及林耕宇と共に現地交渉の爲め宛平縣城に向つた。

又二十九軍顧問櫻井少佐は事件勃發と共に三十七師長馮治安に面談し其不都合を訊したところ馮師長は宛平縣城内の支那軍は自分の部下だが城外の者は支那軍ではない匪賊であると答へた爲に櫻井少佐は直に宛平縣に向つて城内の支那軍に對し馮師長の意志を傳へ且一文字山に來て一本大隊長に會つて馮師長の通げ辭を傳へた併し飽く迄慎重を期する我軍は曩に龍王廟附近から射撃したのは支那軍であるの確實なる証據を握り爾後の交渉を有利にする爲に種々偵察する處があつた然るに午前五時二十分に至つて不法にも再び龍王廟から我に對し猛烈な射撃を始めた茲に於て聯

王の
いす

三

2880

0594

四
隊長代理森田中佐は斷然意を決し第三大隊長に對し龍王廟攻撃を命じたのである時正に午前五時三十分

滿を持してゐた大隊は茲に勇躍攻撃前進に移り僅か七分で龍王廟を攻略し續いて深き胸に達する永定河の濁流を渡り猛烈に追撃に移つた（爾後の戰鬥要圖第一参照）龍王廟附近には馮の所謂匪賊と稱する二十九軍將兵の死體約三十個が遺棄されてゐるのは皮肉である

當時宛平縣城頭には白旗を掲げて抵抗しない事を確約しつつあつた支那軍が不信にも側方から我に對し猛烈な射撃を加へた

森田中佐は特務機關を通じて左の條件を支那側に要求した

宛平縣軍隊は速に永定河右岸地區に後退すべく然らば我も亦右岸に出て居る部隊を左岸地區に集結する

若し右案を聞かざる時は城内人民を城外に出すべし其後に於て我は宛平縣に向ひ攻撃を開始する若し支那軍にして住民を城外に出さなければ我軍の攻撃により人民の死傷が出來てもその非は全然支那軍の責任である

右要求に對し支那側は第一案を實行する事を表明した

警備司令官の任務を代行してゐた聯隊長牟田口大佐は聯隊附岡村中佐が天津より歸來したので其の任務を同中佐に委ね午後一時北平發の列車で豊台に行き此處で各方面と連絡した上で午後三時

蘆溝橋に到着し宛平縣城附近の部下軍隊の指揮を執つた

之より先聯隊長は事件勃發直後通州に野營中の第一大隊主力に對し宛平縣に急行を命じた第一大隊は炎暑を冒して徒歩で北平の南側を通つて急行軍を續け概ね夜半迄には到着する事が予測せられたので聯隊長は兩大隊が集結した上聯隊の主力で宛平縣城東北角に向つて攻撃するに決した
第三大隊（大隊砲一小隊を屬す）は午後六時現在地たる永定河右岸地區から轉進を開始し龍王廟北方で永定河を渡河し明九日拂曉攻撃の爲の位置に就いた

當時宛平縣城内の支那軍は依然白旗を掲げて我に對し射撃をした支那軍の不信も此處まで來れば我も亦支那軍全體が不信の塊で一々之を取上げて言ふのは大人氣ない様な感じにもなるのである
木原少佐の指揮する第一大隊は午後十一時十分一文字山高地に到着一木少佐の指揮する第三大隊も亦戦死傷者の收容を終り相前後して所命の地點に集結を終り夫々明拂曉攻撃を準備したのである

九日

午前二時過軍司令官から宛平縣城内の支那軍は九日午前四時永定河右岸に撤退するよう協定が済んだから之が攻撃を中止せよとの命令に接した然るに午前四時になつても何等撤退の模様がない許りでなく迫りに射撃を爲したが例の支那軍の事で上からの命令が徹底しないのかも知れぬと我慢に我慢をして我は之に對して應戦しなかつた然るに午前四時半になると城内から迫撃砲を打ち

出したその爲第三中隊には死傷者三名を生したので茲に於て堪忍袋の緒も切れ河邊旅團長は意を決せられて歩兵砲を以て射撃するを許されたのである然し城内には櫻井少佐が居るので支那軍に對して城壁上に膺懲射撃を加へる事にした我射撃正確で見る見る内に壁の壞れるのが見え間もなく敵を全く沈黙せしめたのである

この時二十九軍からは委員が來て必ず城内の支那軍を撤退させるその代り保安隊で守備させるから射撃を中止せられ度いと嘖願があつた河邊兵團長は此の言を容れ射撃を中止せしめられた

次て天津より到來した筒井少佐の指揮する第二大隊が豐台に到着したので之を一文字山に進め支那軍を監視し聯隊の主力は豐台に集結したのである（要圖第三参照）

支那側其後の情態と從來からの不信行爲から察するのに外交的交渉は彼の戦備を整ふる時間の餘裕を得る爲の術策にあるのを看破せられ旅團長は嚴に之を監視するの必要を認められ聯隊主力を以て監視するやう命ぜられたので聯隊は第一大隊を以て西五里店附近に第三大隊を以て東五里店附近に第二大隊及歩兵砲隊を以て一文字山と其附近で夫々戦備を整へ苟も敵に不信の行爲があつたら直に立て之を膺懲する姿勢で支那側を監視する事にした午前七時永定河方面で又敵の銃聲を聞き聯隊將兵の士氣大に緊張した

この時北平特務機關の情報によると支那側は爾后永定河を越へて前進せず又西苑方面の支那軍は

陣地を占領した

第六中隊は旅團命令によつて福田部隊長の指揮する戦車隊に配属せられ北平南方馬村方面に行動する様に命ぜられた

七月廿八日

明くれば廿八日各隊は午前一時から二時の間に行動を起し所命の時刻に所命の地點に攻撃準備を終り今や遅しと攻撃前進の命を待つ將兵の意氣は既に敵を呑む概がある午前五時三十分第二第三大隊は命令一下一齊に前進を開始し砲兵も亦槐房の敵に對し射撃を開始した

我が第一線新行宮南北の線に進出する頃榮茂莊及槐房の敵は猛烈に射撃し出した各隊は繁茂してゐる高粱や所々に密生してゐる柳を利用しつつ一意前進し第二大隊は午前六時稍過榮茂莊の敵を撃退し萬字地に向つて前進した又第三大隊は行宮の敵を追ひ聯隊砲及重砲兵の協力の下に槐房の敵を攻撃中である時に天津方向から友軍爆撃機飛來し南苑の敵陣に對し數十發の爆弾を投下し壯烈な爆音を聞き將兵の志氣頓に振つた

第三大隊正面の敵は迫撃砲機關銃を有する兵力約三中隊で各所に堅固な陣地を構築し頑強に抵抗したが一木隊長は此の敵を北方から攻撃し敵の頑強な抵抗を排除し槐房部落の中央を突破して後端に進出し遂に敵を退却の余儀なきに至らしめた

聯隊主力である第二大隊及第一中隊は槐房の南方を通つて東に進み南苑の西北角に向ひ一意前進

に努めた萬字地に着くや直に南苑の西北角に對する攻撃を準備中北平に通ずる道路を點々と敵兵が北上するのを目撃した聯隊長は南苑の敵が最早退却し始めたと判斷し正面少數の敵攻撃に専念して居ては敵の大部を逸するのを虞れ直に敵の退却を遮斷して之を殲滅するに意を決し第三大隊を直ぐ天羅莊に轉進し敵の退路を遮斷せしめ聯隊主力を馬村に向け轉進させた大陸の酷暑彌が上にも峻烈追撃中の將兵は西瓜に渴を醫しつつ敵殲滅の意氣に燃えつつ道を馬村に急いだ

第三大隊は所々に散在する敵の敗殘兵を掃蕩しつつ聯隊所命の天羅莊に陣地を取り終るか終らぬ中に敵の大部隊が退却して來た此に於て第三大隊は敵の近づくのを待ち一舉に猛射を浴せ掛け之を殲滅させたこの附近一帯は支那には珍らしい水田や蘆の地帯で敵は已くなく道路上を退却して來たので全く之を縱射し文字通り殲滅させた人馬の死骸道に溢れ敵師團長趙登禹 佟副軍長を屠つた後になつて支那側が戰場掃除を行つたが其の慘狀を見て 皇軍の武威に恐怖を懷いたとのである

道路上の死體のみで千を下らず其他の戦傷者は夥しひ數に達するであらう普通戦傷者は戦死者の三倍か乃至四倍であるから單に此正面丈でも戦傷者の數は三千乃至四千名に達したと見て差支無ひであらう

聯隊主力は東方に銃聲を聞きつつ正午其先頭を以て馬村附近の敵を攻撃して之を撃退し敵の主要

な退路を遮断したが敵は第三大隊の爲退路を阻止されたので南苑から東に向つて退却したらしく聯隊主力正面には來なかつた此頃東方並北方に銃聲を聞いた之は南苑から退却した支那軍に對し通州から前進して來た薺島部隊によつて其の退路を遮断されたのであらう

又南方に當つて殷々たる砲聲を聞ひたが之は川岸兵團の砲撃であつた

時に一文字山及豐台は優勢な支那軍の攻撃を受け目下苦戦中だとの情況を聞き勞を癒す暇もなく戈を轉じて豐台に向つた

この時豐台にゐた第九中隊は一文字山の野口騎兵部隊が危険だと云ふ情況を知ると共に勇躍して救援に當り西五里店附近の敵を撃退し又第六中隊は戰車隊を共に馬廠附近から急遽一文字山救援に轉進し午后四時豐台に着き直に一文字山に進み目に餘る極めて優勢な敵の眞只中に進出して鐵道線路南側の敵を攻撃した敵は我勇敢な攻撃に志氣阻喪し退却し始めたので野口騎兵部隊の危急も救はれ豐台も爲に安全となる事が出來たのである

斯くて此の日は聯隊主力は豐台 第九中隊は西五里店に第一中隊は大井村に第六中隊は一文字山南方の鐵道線路の南側に夫々位置し至嚴の警戒の裏に夜を徹した

七月廿九日

翌れば廿九日事件勃發以來我聯隊將兵は之より國民の夢寐にだも忘れる事の出來ない宛平縣を攻略した日である

0000

0601

此の日河邊兵團長は宛平縣城攻略を牟田口聯隊長に命ぜられたその爲聯隊の外に工兵中隊を配屬せられ又鈴木砲兵部隊及福田戰車部隊も協力する事となつた

ここで聯隊長は砲兵に前面の城壁を又工兵に城門を破壊させ筒井大隊長の指揮する第二大隊を突撃隊として一舉宛平縣を屠る策を立て午後六時十分砲聲を開始した砲撃は殷々として天地を震撼し城壁は黒煙と共に刻一刻破壊されて行つた

敵の迫撃砲が各所に炸裂し機關銃小銃火雨と飛び散るこの中であつて砲兵は一弾は一弾より射撃の正確さを加へつて午後七時三十分になつて遂に城壁に突撃路を開設した

それが終ると共に機を窺つて居た工兵隊は爆薬筒を手にし敵彈雨下の中を物ともせず城内に爆薬筒を装し合圖と共に點火した爆音は熾々として上る煙と共に四邊を震撼し城内爆破に成功したそれを同時に筒井大隊長は砲兵隊によつて作られた突撃路より第四中隊を 工兵隊が爆破した城門より第五中隊を各々突進させ大隊長は豫備隊たる第六中隊を提けて第四中隊の後方を城内に入した時正に午後七時四十分である

大隊砲小隊 小泉機關銃中隊は大隊の突撃直前迄城壁上に居た敵を射撃して大隊の突入を容易ならしめた大隊は突撃后北側及南側の城壁上と中央道路を前進し抵抗する敵兵特に迫撃砲火を冒し宛平縣西方城壁を占領し續いて蘆溝橋橋梁西端に進出し完全に同地を占領した時正に午後八時四十分である

聯隊長は軍旗を奉じ午後八時一文字山を出發し城壁の突撃路を攀登し宛平縣城壁の東北角に前進した敵の小銃火や迫撃砲射撃は依然として熄まない中に宮城に向つて城壁上に部隊を整列させ喇叭「君が代」を吹奏させた囂鳴たる音が四方に響き渡る裡に宮城を遙拜し天皇陛下の萬歳を三唱した將兵感正に胸に迫り涙に戎衣を濡した協力部隊も亦之に和した附近の山川草木皇恩に靡くの概があつた

七月三十日

翌三十日には長驅長辛店を次て三十一日には更に一木部隊は遠く進み良郷を占領したここで良郷及長辛店の守備を川岸兵團に譲り聯隊主力は豊台に筒井部隊は南苑を守備し治安工作に任じたが八月八日北平に入城した聯隊主力は西方廣安門より筒井部隊は南方永定門より歩武堂々と北平市の中心に進み大使館區域前に集合した今日か明日かと日本軍の入城を待ち兼ねてゐた居留民は手に手に日章旗を振り心からなる歓迎を受けた當時の感激は迎ふる者も迎へられる者も涙潜として聲なく唯胸が高鳴なるのを覺ゆるのみであつた爾后北平市及その附近の治安維持に任じてゐる時々遠く郊外に匪賊を討つ附近の良民は皇恩に浴し北平一帯の治安は日一日と回復し市内は全く平穩に復し街頭の商店も店を開き路上に喜々として遊んでゐる小兒を見ても以前廿九軍の壓迫の下に色なき彼等とは感ぜられない皆皇軍の正義に感泣してゐる

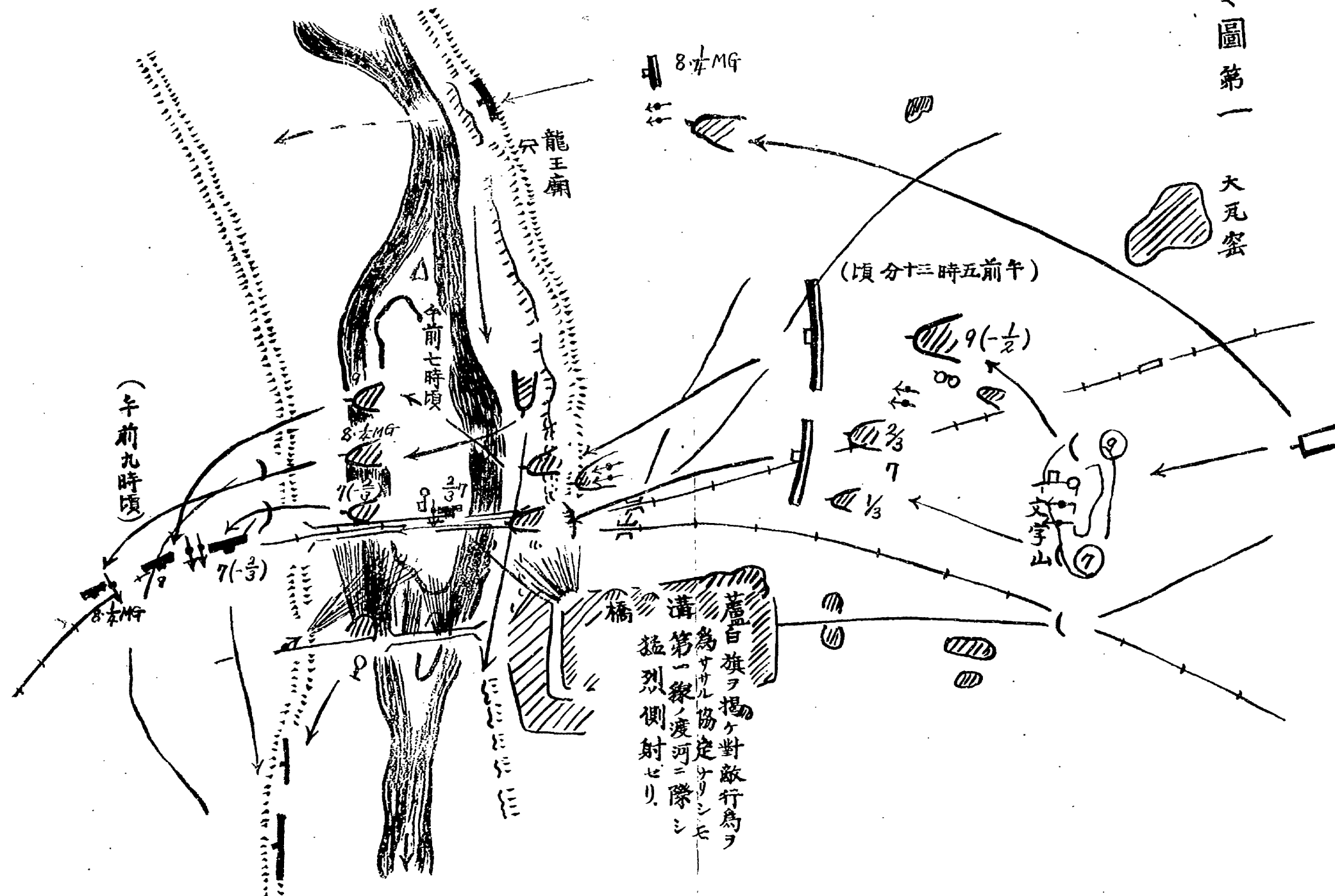
八月下旬敵兵良郷西方の山地を北上する報を受け第一大隊は門頭溝に赴き彼の山地間で牛島兵團

長の指揮に一時入り永定河の濁流を渡り下馬嶺の嶮を冒し高さ二五〇〇尺乃至四二〇〇尺の山地
間で戦ひ武勳を輝かしつつ九月一日歸來した
今將に皇軍全線に亘つて敵を撃破しつつ武勳功績各所に現はれるの時我等一同第一線参加の日を
待望しつつ日々に軍務に精勵してゐる

蘆溝橋附近豊台部隊經過要圖

ルケ於ニ午前日八月七

要圖第一

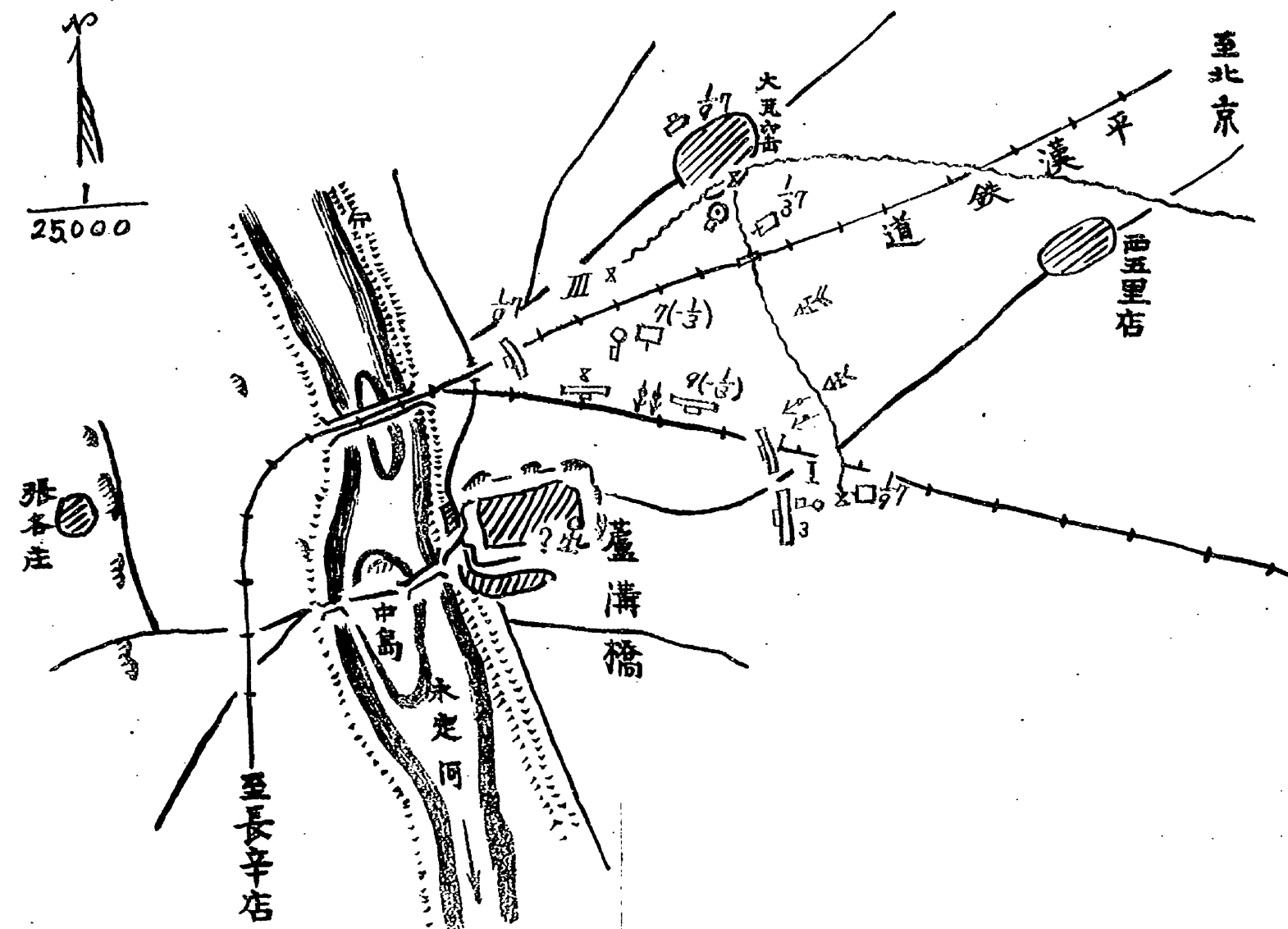


0605

蘆溝橋明天攻擊要圖

(七月八日夜ヨリ九月朔ニ至ル)

要圖第二

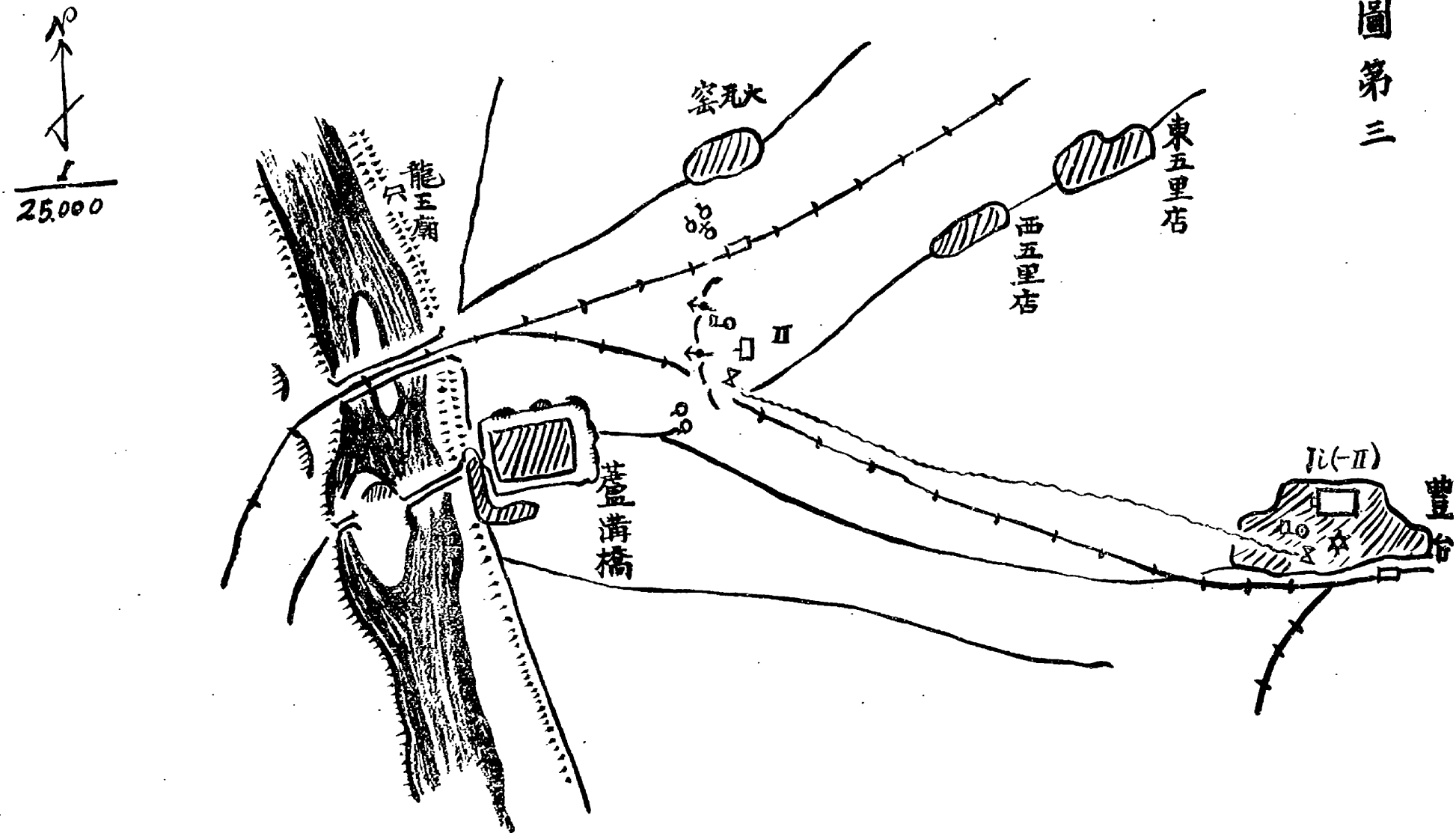


0606

圖要備配隊部口田牟迹附台豐

ル々於ニ時六後午日九月七

要圖第三

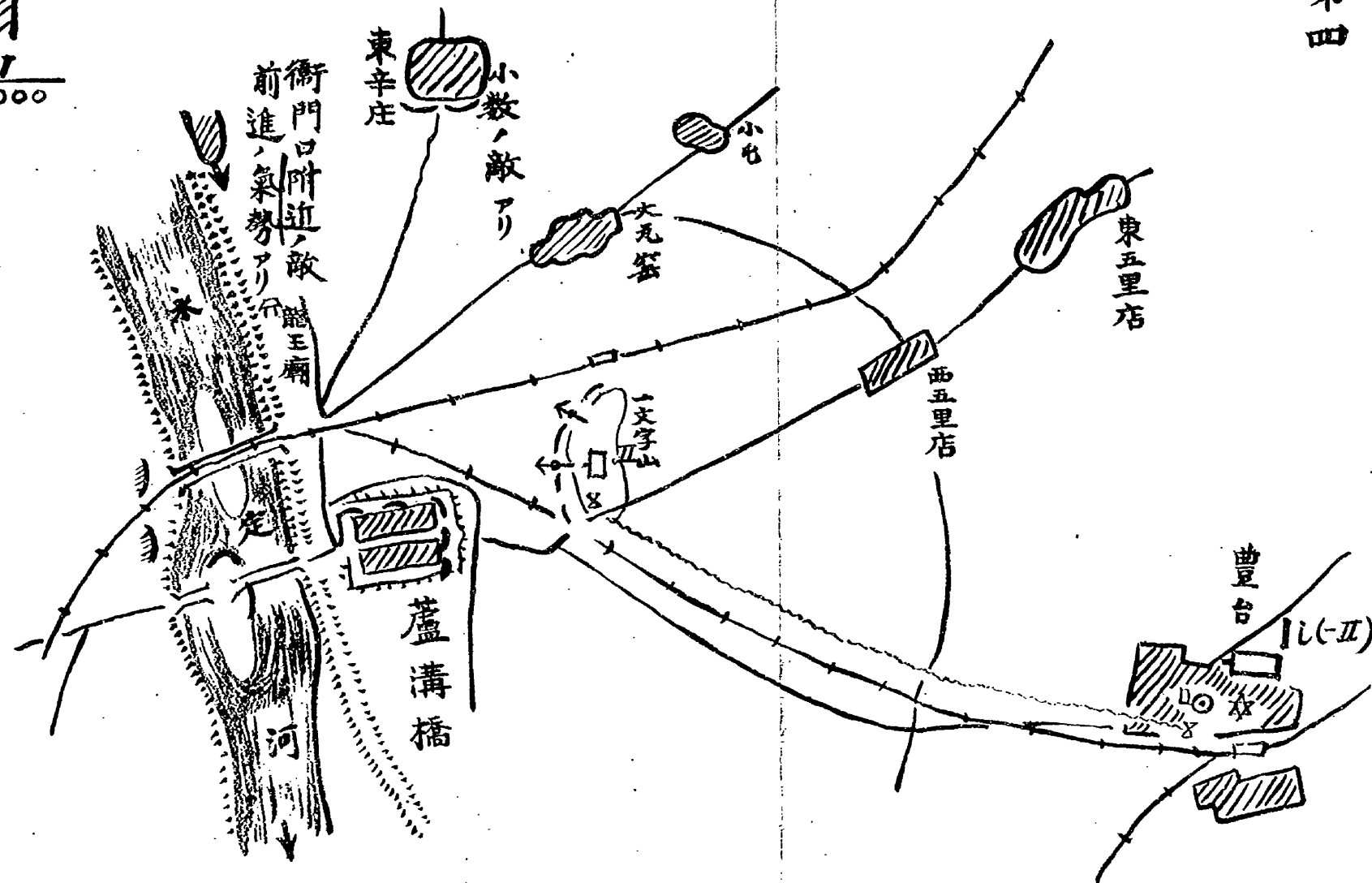


0607

戰前於彼我態勢要圖
於七月十日午前七時

第四圖要

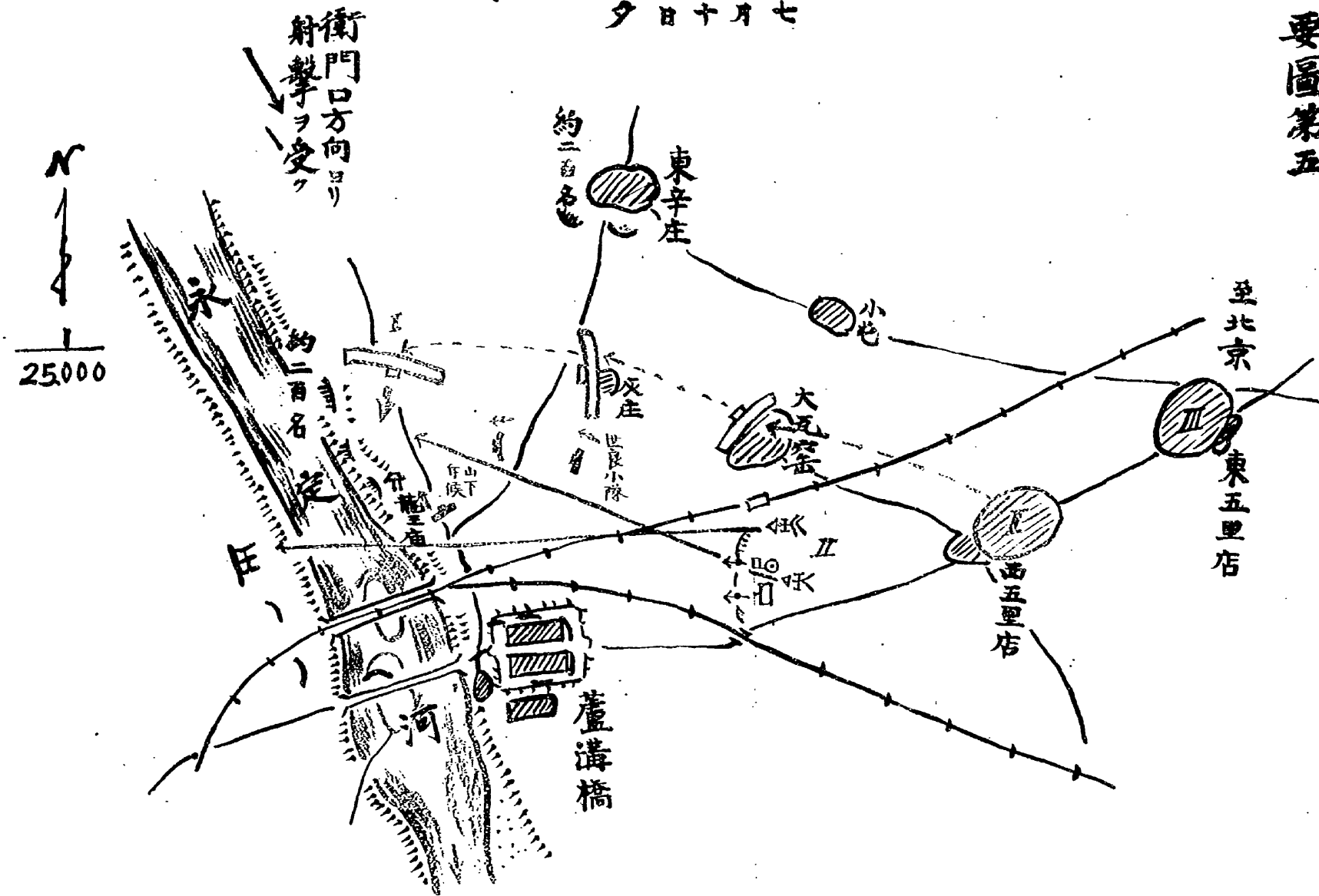
40
1
25.000



0608

龍王廟附近戰鬭經過要圖
 七月十日夕

要圖第五



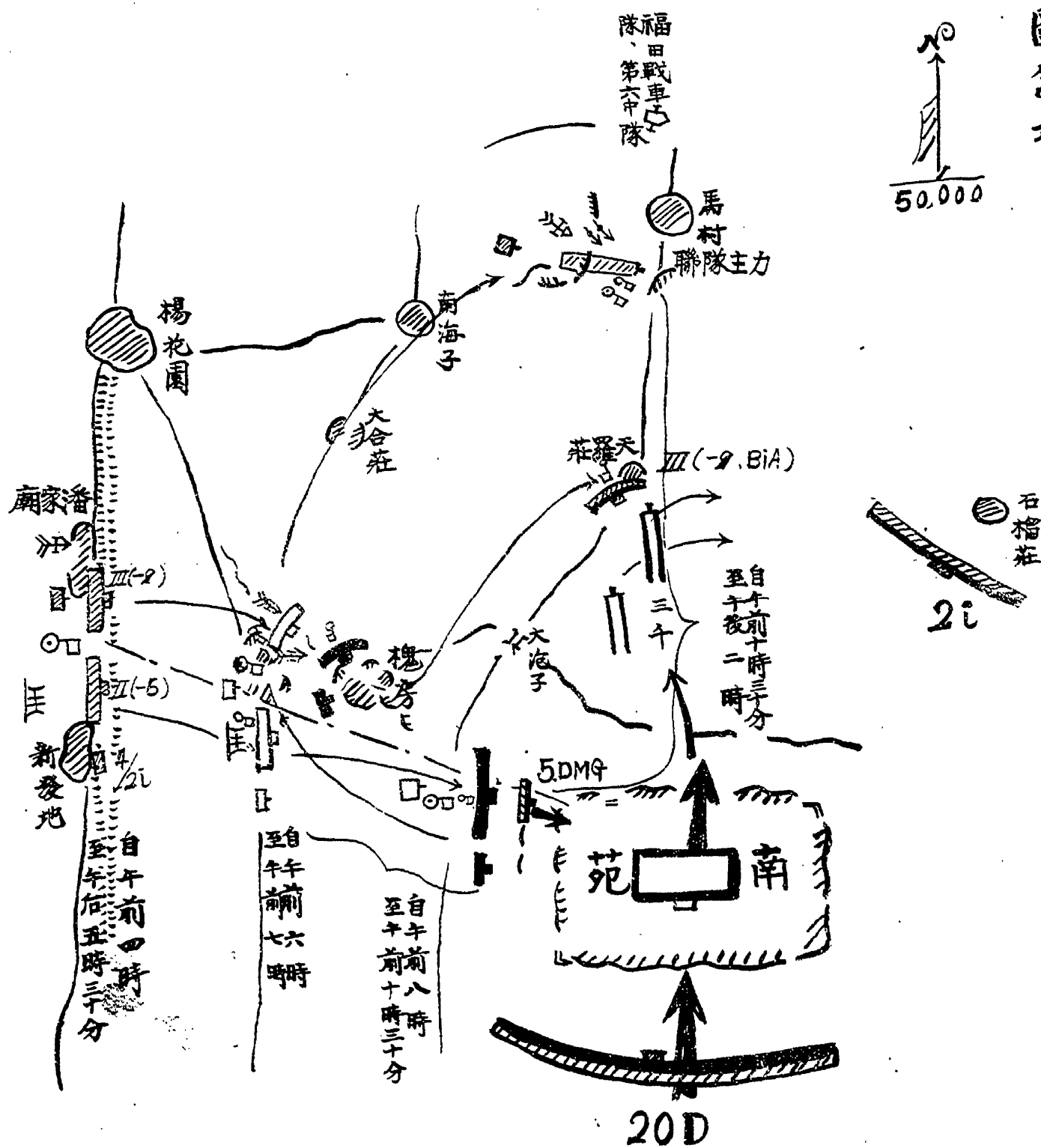
0609

圖要過經關戰近附苑南

ルヲ於二日八十二月七

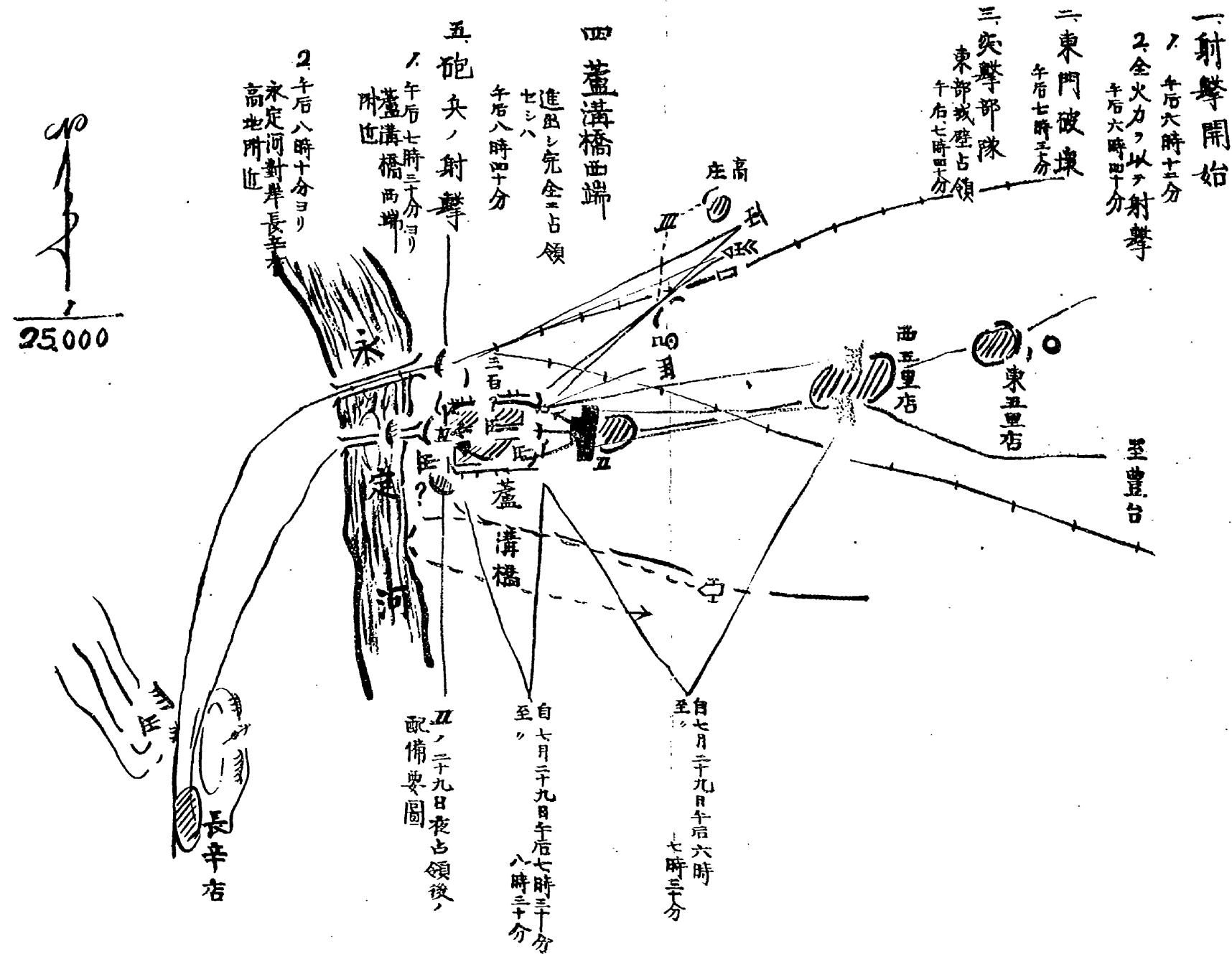
要圖第六

0610



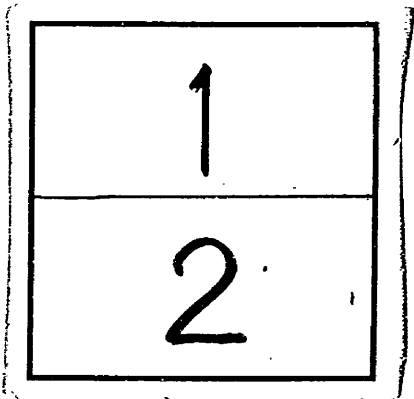
蘆溝橋攻擊戰經過要圖 (於七月二十九日)

要圖第七

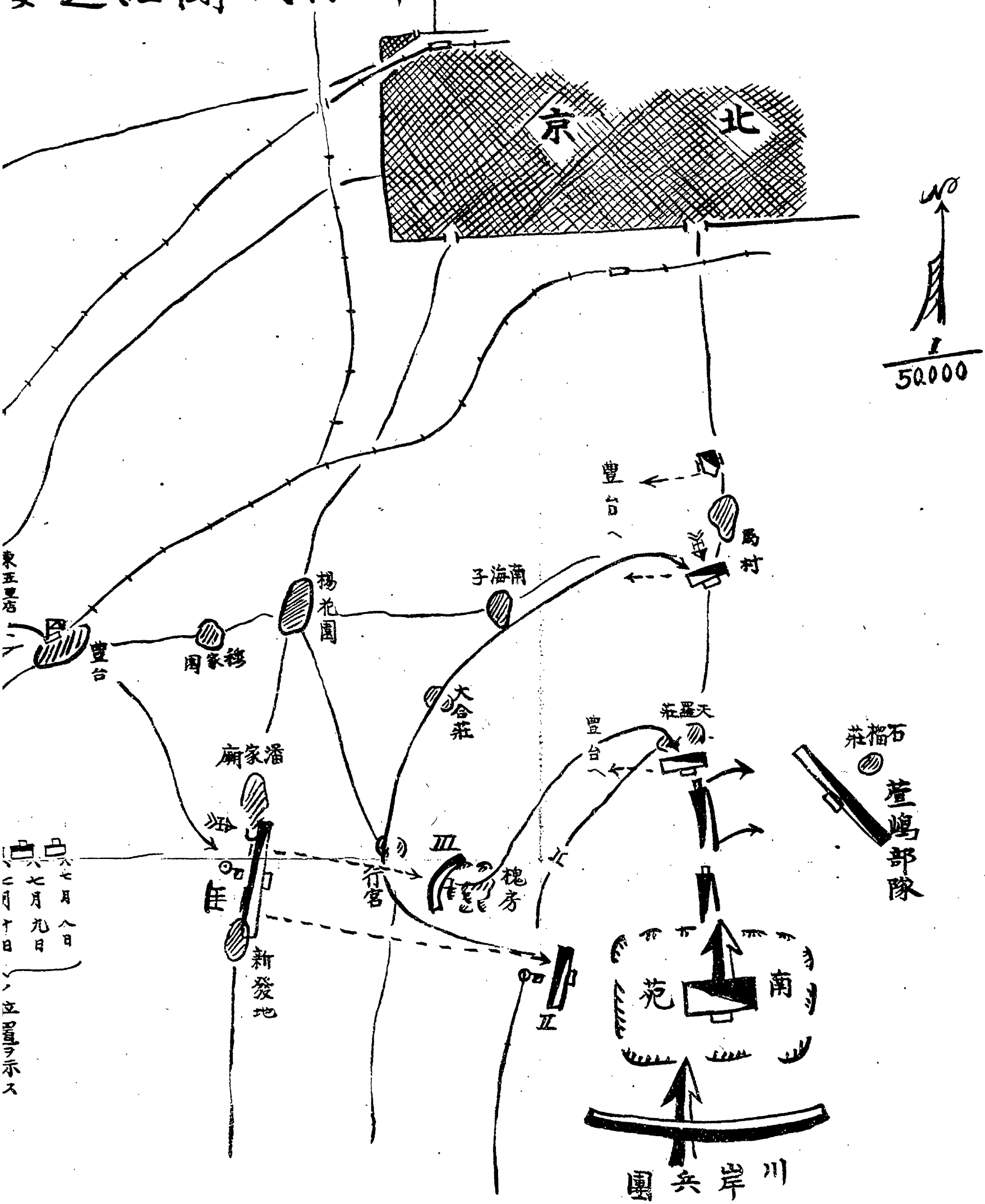


0611

分割撮影ターゲット

分割した 部 分 の 撮 影 順 序	
分割撮影 した理由	A 3 版以上のため
文書等名	牟田口部隊戦闘経過 要図
上記のとおり分割撮影したことを証明する。	

要通經閼戰隊部口田牟



六月八日
六月九日
六月十日
立置ヲ示ス

圖要過經闢戰隊

